

紅筆願文

野村胡堂

—

「御免」

少し職業的に落着き払った声、錢形平次はそれを聞くと、脱いでいた肌を入れて、八五郎のガラッ八に目くばせしました。あいにく生憎きあいにくようは取次に出てくれる、女房のお静がいなかつたのです。

「へッ、あの声は臍から出る声だね」

ガラッ八は頸を縮めて、ペロリと舌を出しました。

「無駄を言わずに取次いでくれ」

紅筆願文

「当てっこをしましようや、——年恰好、身分身装」

「馬鹿だなア」

「まず、お国侍くにぎし、五十前後の浅黄裏あさぎうらかな」

ガラツ八は尤もつともらしく頸くびを捻ひねります。

「訛なまりがないぜ、——それに世馴れた調子だ——まず大家たい家の用人用ひんというところか

な

平次もツイ釣られます。

「御免

もういちど、鏗さびのある素晴らしい次低音バリトーンが、奥のひそひそ話を叱しかるようにな響きました。

「それ、お腹立ちだ。言わないことじやない」

ガラツ八は月代さかやきを薬指かで搔いて、もういちどペロリと舌を出しながら、入口の方へ飛んで行きます。

「仔細しさいあつて、主人御名前ごめんこうむの儀は御免蒙まかるが、拙者ちよつとは石川孫三郎と申す者。平次殿にお願いがあつて罷り越した、ほんの一寸逢一寸つて頂きたい」

少し横柄おうへいですが、ハキハキと物を運び馴れた調子です。

「お聞きの通りだ、親分、——この賭かけは口惜くやしいが親分の勝さ、四十五六の型へ入れて抜いたような御用人だ。逢いますか、親分」

ガラツ八はモモンガアみたいな手付きをして見せます。

「御武家は苦手だが、折角せつかくこんな所へ来て下さつたんだ、とにかくお目に掛かるとしよう。此方こちらへ丁寧ともきりまるにお通し申すんだ」

「お家の重宝友切丸ふんじつか何か紛失ふんしつしたんだろう、むずかしい顔をしているぜ、親

分

「へエ——」

ガラツ八はようやく客を導いて来ました。前ぶれ通り、存分に野暮つたい四十五六の武家、羽織の紐を觀世縫で括つて、山の入つた袴、折目高の羽織が、少し羊羹色になつていよいよと、典型的な御用人です。

「これは、高名なる平次殿でござるか。拙者は石川孫三郎と申す、以後御見識り置きを願いたい」

かたひじ 肩肘を張つて、真四角にお辞儀をします。

「へエ、恐れ入ります。私は平次でございます。どうぞ、お手をおあげ下さいまし」

きょうしうく 平次はすっかり恐縮してしまいました。どうも一番あつかい悪い種類のお客

様です。

「早速ながら、用件を申上げるが、実は平次殿、お家に取つて容易ならぬ事が起つたのじや。何とか力を貸しては下さるまいかの」

武家は折入った姿ですが、平次は何かしら釈然しゃくぜんとしないものがあります。

「どのような事か存じませんが、私は町方の御用うげたまわを承つているもので、御歴々の御屋敷の中に起つたことへは、口をきくわけには参りませんが、ヘエ」

体よく敬遠するつもりでしょう、平次は紙袋を冠かぶつた猫の子のように尻ごみをして居ります。

「御尤千万ごもつともせんばん、だが、——平次殿に乗出して頂こうと言ふわけではない。ほんの少しばかり、知恵を拝借すればよいのじや」

「ヘエ——」

「実は御親類筋の安倍丹之丞様から、平次殿のことを承つて参つたが、この謎なぞを解くものは、江戸広しと雖いえどもまず平次殿の外にはあるまいと——」（第二卷

「傀儡名臣」参照）

押の強そうな用人に捉まつて、錢形平次もことごとく降参してしまいました。

二

この勝負はとうとう石川孫三郎の勝でした。平次を口説き落すと、

「実はこれじや」

懐から取出したのは、小さく畳んで紙入に挿んだ小菊が一枚。畠の上にひろげて、平次の前へ押しやるのである。

「これは？」

「見らるる通り、一枚の小菊の中ほどに、紅筆^{べにふで}で書いた、得体の知れない仮名^{かな}文字^{もじ}が二十五ある」

差覗さしのぞ

くまでもありません。女の使う筆紅ささべにを、筆に含ませて書いた文字が二十
五。平次が見てもなかなかの達筆ですが、不思議なことに、最初の一^か行が『あ
なかしこ』と読めるだけ、あとは、どう読んでも意味が通じません。

その全文を掲げると、

あなかしこ
えのちをす
まいわかみ
たおのとや
めちちにか

こんな具合になります。

「これが平次殿、お屋敷奥庭の祠ほこら、

何様とも判らぬまま、お稻荷様いなりと申してい

る社殿の中にあつたのじや」

「へエ——」

「それも一度や二度ではない、三度までも」

石川孫三郎も、ゴクリと固唾かたづを呑みます。

「どんな弾はずみで、見付けなすつたんで?」

平次の好奇心もかなり揺ゆすぶられます。

「三百十日の嵐で、お屋敷の廂ひさしも墀へいも、奥庭の祠ほこらもひどく傷いたんだ。あちらこち
ら手入れをする序ついでに、雨漏あまもりのひどくなつた祠も修繕させようと思うと、正面台
の上に、これがキチンとのつていたのじや」

「御本尊は?」

「御本尊と言つてはない。祠の中には、御幣ごへいが一本立つてゐる切りだ。その御
幣も雨漏りでひどく汚れたが、その御幣の前の台の上に、これが置んだまま置

いてあつたのじや」

「汚れもせずに」

と平次。

「左様、——多分嵐の後で置いたものであろう。台はまだ乾き切ってはいなかつたが、この紙には何の汚れもなかつた」

「へエ——」

「それだけならよい。が、何と申しても不気味な紙片だから、拙者一存の取りはからいで、祠の前で焼き棄てすてしまつたが、翌日のぞの朝、何気なく覗いて見ると、また同じものが台の上に供えてある」

「——」

「それも焼き棄てた、もうこれで大丈夫と思うと、今日——三日目に、またこの小菊が乗つっている」

「誰かに相談しましたか」

「いや、——御主人様は永の御患おんわざらい、若殿様はまだお若い上に、至つてお弱い方じや。こんな事を申上げたら、お心持にもお身体にも障さわるかも知れない。三日目の今朝になつて、お屋敷にこの春から泊つていらっしやる、御親類の方——浅井朝丸様あさいあさまるという方に相談申上げ、いろいろ考えたが、何としてもわからぬ。思案に余つて、いつぞや安倍丹之丞様うけたまわから承つた平次殿が名前を思い出し、押して参つた次第じや」

石川孫三郎はそう言つて眉を垂れるのです。押の強がんこそうな頑固がんごな感じのする人間ですが、一徹てつの忠義らしいところが、次第に平次の好感を誘さそいます。

「ところで、この文句を読む見当でもつきましたか」

平次はこの謎の二十五文字に吸付いて、一生懸命考へている様子です。

かりは読む工夫はないと言われる。縦から読んでも横から読んでも、
でも、逆に読んでも読み下せないのじや」
斜に読ん



「なる程これはむずかしい——ところで、この奥庭の祠とやらへ、外から自由に出入りが出来ましょうか」

「と申すと」

「よくお屋敷方の内神様で、堀の一箇所に凹みを掘え、外から自由にお詣りの出来るようにしたのを見掛けますが——」

「いや、そんなのではない。堀は嚴重な板堀で、忍び返しまで打つてある、容易に外から入れる場所ではない」

「すると——」

平次はもういちど謎の仮名文字に目を落しました。

「そんな事はありよう筈はないが」

石川孫三郎の顔は硬張りました。何と言おうと、どう誤魔化そうと、この悪戯は、屋敷内に住んでいる者の仕業でなければなりません。

「ところで、この文句を読む見込みはどうしても、立ちませんかね」

と平次。

「残念ながら見込みはない。そつと写し取つて、近所の手習の師匠にも見せたが、——もつとも浅井朝丸様は、これは学者や坊主は、読めまい、吉備真備の読んだ耶馬台の詩のようなものだから、安倍仲磨の蜘蛛あべのなかまろでも下がってくれなきや——と申される」

「なるほど、耶馬台の詩見たいなものだ、——ところで御用人物、御屋敷に住んでいらっしゃる御人数は？」

「殿様は六十五におなり遊ばす、御病氣で一年越しお床に就いた切りだ。若殿時之助様は二十五でまだお一人、よく出来た方だがお弱い。奥方はお勇様と仰つしやつて四十」

「後添でいらっしゃる、若殿様とは継ままでい仲なかだが、至つてお睦むつまい。奥方に
は今年十九になる若葉様という、それはそれは綺麗なお嬢様がある」

孫三郎はこの主人の娘がひどく自慢の様子です。

「それから?」

「掛かかり人の浅井朝丸様、殿様の遠い甥おいご後じや、これは二十七歳、文武の心得も

ある」

「」

「外に拙者と、お腰元が一人、お松といつてこれは十八、仲働が二十六のお宮
という忠義者、下女が二人、それに鉄という中間ちゅうあんがいる。鉄太郎とか鉄五郎と
かいうのであろう、請状うけじょうに名前は書いてある筈だが、二十八になる良い若い者
で、鉄、鉄で通っている」

「それだけですね」

「もう一人、門番は宇内^{うない}という老人夫婦、六十を越しているが、恐ろしく達者だ」

「——

「外には、馬が一頭、猫一匹——」

「よく判りました。その御人数の中で、仮名文字をこれだけ綺麗に書けるのは、どなたでしょう？」

「左様^{さよう}、——まず腰元のお松と——」

「御嬢様の若葉様と、奥様のお勇様と——」

平次は指を折りました。

「いや、お嬢様や奥様は、このような悪戯^{いたずら}を遊ばす筈はない」

「浅井朝丸様とやらも、書けば書けるのでしょうか。若殿時之助様も、御用人のお前様も」

「飛んでもない」

石川孫三郎は大きく手を振ります。

「ところで御用入様」

ひどく改まつた平次の顔を、石川孫三郎は不安らしく見上げました。

「この謎の仮名文字を読むと、決して幸^{しあわ}せなことはございませんが、それでも読みたいと仰しやるでしょうか」

「？」

「この文字は恐ろしい言葉でございます。これが読めると、御用入様一日も一
刻も安い心がなくなるばかりでなく、お屋敷の皆様には恐ろしい疑^{うたがい}の雲がかかります
ますが、それでも——」

平次はもうこの謎を解いてしまつた様子です。

を読まずに焼いてしまつたら、悪戯者いたずらものはまた四枚目を用意するだろう。悪いものなら悪いもののように、書いた者を詮議して、後の祟りのないようにするのが、この石川孫三郎の勤めと申すものであろう」

「いかにも、御尤もごもつと、——では読み下します、御覽たたか下さい」

「——」

平次の指の先は、小菊の真ん中、五つずつ並べて五行に書いた、三行目の三番目——一番真ん中のわという字を指しました。

「御用人様、私の指の動く通りに読んで下さい」

平次の指は紅筆で書いた仮名文字の上を、吉備真備きびのまさひを救つた蜘蛛くものように動きます。

「何々、わ、か、と、の、お、い、の、ち、を、す、み、や、か、に、ち、ち、め、た、ま、え、あ、な、か、し、こ」

石川孫三郎の顔は、平次の指を追つて読み上げるうちに真っ蒼になりました。
後の半分ほどは口の中で呑んでしまって、最後の一 句でゴクリと固唾を呞みます。

あなかしこ
えのちをす
まいわかみ
たおのとや
めちちにか

「御用人様、——若殿お命を速やかに縮め給え、穴賢——と紅筆で願文を書く
ような人間は、御屋敷に心当たりはありませんか」

「ない」

孫三郎は深々と腕をこまねいて、畳の縁を凝じつと見詰めて居ります。

「読んで上げない方がよかつたかも解りませんが、お屋敷にこんな大それた願文を書く人間がいちや拋ほうつてはおけません。一度はイヤな思いをなさるつもりで、この書き手を捜し出し、後腐あとくされのないようになさいませ」

平次はこうでも言う外はありません。

「有難う。屋敷の名も申さず、定めし無礼な奴と思うであろうが、何事もお主のため、——この私に免じて許して下され。さつそく悪者を捜し出し、思い知らせた上、お礼に参るであろう。さらばじや、平次殿」

孫三郎は打ち菱しおれて帰つて行きました。

「親分、変なことがあるものだね」

ガラッ八は酔っぱい顔をします。

「まだまだうるさい事になるだろうよ」

平次はまだ何か考へてゐる様子です。

三

それから三日。

「御免」

錆さびのある声が少し落着おちつけきを失つて、また平次の戸口戸こうを訪おとづれました。

「親分、來たぜ」

「シツ、丁寧に取次ぐんだ」

平次に促うながされて、ガラツ八は石川孫三郎を案内して来ました。

「平次殿、——大変なことに相成つた」

典型的な用人が、挨拶も忘れて平次の前にドカリと坐るのです。

「悪戯者いたずらものが解りましたか」

「それがトンと相解らぬ、いや解つたつもりになつたばかりに、大変なことに相成つたのじや」

「

「平次殿、この上は隠しても無益なこと、何も彼かも打明けて申上げる。実は、拙者はがの主人と申すのは本郷元町に御屋敷のある、二千五百石取の御旗本、横山主計かずえ様」

「大方見当は付いて居りました」

「なるほど、さすがは平次殿。主人御名前を隠し了せたと思つたのが拙者おおの浅あさ墓あささだ、——それはともかく、あの謎の文句を、立帰つて主人主計様にお目にかけたところ、御病中ながら以ての外の御立腹。若殿時之助様御命を縮めたいと思うものは、当屋敷内に、継ままでしい奥方お勇様の外にある筈はない——と仰しやる」

「御重態の床から起き上がり、奥様を御呼付け、弓の折れを持つての御折檻じや」

「」

平次も驚きました。かりそめに読んでやつた謎の言葉が、それ程の騒ぎを起そうとは思わなかつたのです。

「御主人様の御考えも一応はもつともながら、奥様は、御同族の中にも聞えた貞節、二十年この方、手塩にかけてお育て申上げた、若殿時之助様の御寿命を縮めたいと思われる筈もない。拙者も必死とお止め申したが、御老体の一徹さ、何としてもお心が解けない」

「」

「二日二た晩に及ぶ折檻の後、奥様には、よくよく思い定めたものと相見え、昨夜、——深更しんこう、見事に生害しょうがいしてお果てなされた」

せつかん

さだ

「えツ」

平次は水をブツ掛けられた心持でした。

「たつた一人の御跡取時之助様の御寿命を呪われ、殿御腹立ちももつとも至極のろだが、繼ままでしき仲を疑われて生害して身の潔白けっぽくを示された、奥様の御心中もお悼いたわしい。今朝からお嬢様若葉様始め、召仕どもの嘆きで、お屋敷の中は滅入めいつたような心持だ。それに、遺書の立派なお言葉に、殿も今さら後悔の御様子で、——何んにも仰しやりはしないが、黙つて我慢していられるだけにお氣の毒だ」

「——」

平次も何か自分が責められているような心持で、小さくなつて聞いております。

「わけても若葉様わかばさまは、母上様の潔白のろいのため一日一刻も早く、その呪の願文せを書いた悪戯者なだを搜し出し、父上様の御怒りも宥めて上げたいと、葬式の仕度もせ

ぬおむずかりようじや。如何にも、尤も至極の願い、お嬢様の御心持をお察し申上げると、悪戯者を捜すのが何よりの供養くようじや——拙者も包み兼ねて、実はこうこうと、平次殿のことを申上げると、ではその平次殿とやらに、さつそく屋敷へ来て頂くように、お前がお迎えに行つて来いというお言葉じや。殿様、若様にも御異存はない、一刻も早く、平次殿が行つてくれなければ、奥方お勇様の御葬おとむらいの仕度したくも相成り兼ねる仕儀じや。どうであろう、平次殿

石川孫三郎は、手を突いてまた真四角にお辞儀じぎをするのです。

「よく解りました。いかにもお屋敷へ参りましょう」

「それでは、来て下さるか」

「元々私が余計な猿知恵さるぢえを働かせて、あんな謎を解いたから起つたこと、——如何にもお供いたしましよう。悪戯者を取つちめて、キュウキュウ言わせなきや、この平次の心持が納まりません」

「では、平次殿」

「参りましよう。後と言わずに、今、直ぐ」

平次は帯をキュッと締め直すと、羽織を引っかけて、石川孫三郎に従いました。

「親分」

後ろからガラツ八の八五郎。

「来るがいい、手が欲しくなるかも知れない。十手なんか要るものか、相手は御大身の旗本屋敷だ」

四

元町の一郭かくを占領した、宏大な横山主計かずえいの屋敷。平次とガラツ八は、用人石

川孫三郎に案内されて、裏門からお勝手へ廻り、奉公人達の好奇の眼に迎えられて、奥の主人主計の部屋に通されました。

「平次——と申すか、宜しく頼むぞ。世間へ聞えては、当家の瑕瑾かきんにも相成る、その辺抜かりなく——」

病床に半身を起したのは、頽然たる主人です。肝かんの病で久しく寝て居たのが、三日前怒りに任せて奥方を折檻つかし、引続く心痛に疲れ果てて、物を言うのもおづくうそう。

「畏かしこまりました」

平次はそう言うより外にありません。孫三郎に目配せされて、早々に引下がると、次は若殿時之助、これは敷居際で黙礼しただけ。

「平次と申すそうだな。宜しく頼みますぞ」

時之助はそれでも優しく声を掛けます。二十五というにしては、ひどく若く

見えるのは、心も身体も弱いせいでしょう。でも何となく清純な聰明な感じがして、平次には好感の持てる青年でした。

お嬢様の若葉には縁側から挨拶しました。小机に凭れて、眼を脹らしておりますが、下膨れの細面が、類のない上品さです。

「お願ひ申します」

半分は口の中で言う言葉が、千万言の雄弁よりも、少なくとも、平次の後ろからヒヨコヒヨコとお辞儀をする八五郎には徹てつした様子です。

「お嬢様、きつとこの平次が、悪戯者いたずらものを見付けてお目にかけます。——が、一つだけお尋ね申します」

「何など」

「お屋敷で口紅くちべにをお使いになるのは、どなたとどなたでございましょう」

屹きつとした言葉は、死んだ母の無実を少しでも晴らそうと言ふのでしよう。
「皆様御使おつかいの小菊を一枚頂戴いたしとうござります」

「」

若葉は黙つて手筐てばこの中から一と束たばの小菊を取出して、平次の方に押しやりました。

「有難うございました」

一枚取つて見ると、謎の文句を書いた紙と全く同じ瀧すきです。

「それから、これは私の紅、と、筆」

可愛らしい鏡台の抽斗ひきだから出した紅皿が二つと、これも可愛らしい紅筆が

一本、平次の前にそつと押しやるのでした。紅皿の一つは使いかけですが、筆の穂ほが太く柔やわらかくて、とても、美しい仮名文字かなもじなどを書ける品ではありません。

それから平次は掛けあと

掛り人の浅井朝丸に逢いました。二十七八の鬚跡ひげあとの青々とし

た好い男、学問も武芸も相当らしく、わけても錢形平次の近頃の働きにすつかり夢中になつてゐる様子です。

「御苦労だな、平次」

「恐れ入ります」

「何か手掛りは見付かつたか」

「何んにも解りません」

「紅筆で仮名文字を書いたから、女の仕業しわざと考えるのは少し早合点だな。現げんに叔父上はそれでしくじつたのだ」

浅井朝丸は穿うがつたことを言います。

「御尤ごもつともで」

平次はそれに軽くうなづきました。良い参考になると思つた様子です。

それから腰元のお松にも逢いました。十八というにしては、ませた娘で、可

愛らしくも憚発りはつでもあります、持っていた紅皿は、指の跡が沢山あるだけ、紅筆を使つた様子も、紅筆などを持つてゐる様子もありません。

「若殿様をどう思う」

「御慈悲深い方でございます」

何かしら、あこがれを持った眼を、平次がジツと見詰めると、お松は真っ赤になつて差しうつむきました。

仲働のお宮は働くより外に望のぞみも興味もない女。外に下女が二人、年寄の門番夫婦にも逢いましたが、何の変哲もありません。

「もう一人、中間ちゅうげんの鉄てつがあります」

「なるほど」

平次は孫三郎に案内されて、中間部屋に入つて行きました。

「鉄はちょうどいよいよだが」

「中を見ても構わないでしような」

「構わないとも」

孫三郎のうなづくのを見ると、平次は中間部屋に入つて行きました。三畳の隅っこに、蜜柑箱みかんばこが一つ、行燈あんどんが一つ、蜜柑箱は机の代りになるらしく、その上に硯箱すずりばこが置いてあって、箱の中には、手習おさらいをした塵紙ちりがみが二十枚ばかり重ねてあります。取上げて見ると、何か往来物おうらいものを習つている様子、下手へたは下手ながら、一生懸命さが溢あふれているのも不思議です。

「余つ程心掛よほどの良い男ですね」

「渡り中間には珍しい男だ」

「どれどれどんな物を持つてゐるか」

三尺の押入を開けると、上は夜の物、下は竹行李たけごうりが一つ、蓋ふたをあけると、中から着替えが二三枚と、新しい手拭と三尺と、塵紙ちりがみが少々、それに小銭の少し

入った財布と、紙の包みが一つあります。

中を開けて見ると、

「あツ」

三人声を合せたのも無理はありません。紙包みの中から出て来たのは、真新しい天群上で包んだ紅皿が一つ、赤い半襟はんえりが一と掛けです。

「この野郎だツ」

わめく八五郎。

「待て待て、紅皿は真新しい、買ったばかりで手が付いていない、——それに半襟だけは余計だ」

平次は落着払つてその下を見ると、底の方へ押込むように入れてあるのは、一口の匕首ひとくちあいくち、抜いて見ると、思いの外の凄い道具です。

ちょうどその時、中間の鉄がノソリと帰つて来ました。一と目様子を見て取

ると、

「何をしやがる、——誰に断つて人の物に手を掛けるんだ」

平次の襟髪へ手を掛けます。

「野郎ツ、御用だぞツ」

ガラツ八はその後ろから飛きました。

「何をツ」

振り返った鉄の拳こぶしが、思い切りガラツ八の頬桁ほおげたに鳴ります。

「神妙にせい、御用だぞツ」

猛然と撃つかみかかる八五郎、二人は一瞬動物のように争いました。が、どうと

う八五郎が勝つて、鉄を膝の下にギュツと引据えます。

黙つてそれを見ている平次。

「親分、縄を、縄を」

ハネ返そうとする鉄を押えて、ガラッ八は必死と争いつづけるのです。

「もういい、縛らなくたって、話は解るだろう、——鉄とか言つたな、——お前の留守に押入を見て悪かつたが、御主人のお許しがあつたんだ」

「——

ガラッ八の手を離れると、鉄はプリプリしながら起き上りました。二十八の丈夫そうな男ですが、渡り中間のすれつからしなところがなくて、なかなか良い印象を与えます。

「お前に少し訊きたいことがある——この紅と半襟は何のために持つている」平次の調子は静かですが、いや応言わさぬ強さがあります。

「紅や半襟を、折助や中間が持つていちゃ悪いのかえ、——夜鷹よたかや白首あいくちにやるんじやねえ、十六になる妹に持つて行つてやるつもりで買って置いたんだ」

「それは良い心掛けだ、——匕首あいくちは？」

「そいつは男の魂だ。万一の時の用意に持つていちや悪いか」
鉄は事毎に逆ねじを喰わせます。

「よしよし、それもお前の言うのを本当にしよう。ところで、お前は何か隠していることがあるようだ。町方の手で調べて解らぬことはないが、そんな事をして、身分素姓が知れると、お前の請人が飛んだ迷惑をするよ」

[]

「お前も聞いた筈だ、昨夜このお屋敷の奥方が亡くなられたが——それは悪者の悪戯から起つたことだ。詳しく言えば、紅筆で書いた願文から起つたことだ、——その願文を書いた奴は、下手人も同様だが——お前はその疑いを受けている。その紅皿の貰い手をつれて来て、お前と突き合せるまでは、許すわけにいかないよ——」

「お前の身許を洗つて見ようか、それともここで言つてしまふか、どうだ、鉄」

「」

仲間の鉄は黙りこくつて下ばかり見詰めて居ります。深沈たる顔色です。
「八、この野郎は容易に口を割るめえ。請人を捜して、うんと絞つてみろ。どうせ所名前も偽にせだろう。本当の素姓が判つたら、親も女房子も皆な縛り上げて來い」

平次は峻烈しゅんれつでした。

「よし、言うよ、みんなブチまけるよ」

鉄は頭を上げました。

「紅筆の願文を書いたのはお前か」

石川孫三郎は撫つかみかかりそうでした。

横山一家に怨がある。わけても若殿の時之助には、足を一本叩き折って、肥だめへ投り込みたいほどの怨みがある」

「黙れッ」

孫三郎は我慢がなり兼ねました。

「俺の母親が、ちょうどそんな眼に逢つたんだ。やい、味噌搗用人奴、よつく聞きやがれ」

鉄は言うのでした。——今から三年前、若殿時之助がまだ丈夫で元氣だった頃、甲州街道を遠乗りして、 笹塚ささづかで百姓女を一人蹄ひづめにかけて大怪我をさせたことがありました。女が高荷を背負っていたために、馬が驚いて狂奔きょうほんしたというのを理由に、氣の立つていた時之助は、怪我をして肥だめに落ちた女を見捨て、そのまま屋敷へ引揚げて來たのです。

まま床に就いて枕もあがらず、あまりの事に、人を頼んで横山家に掛け合いましたが、剣もほろろの挨拶で、相手にもしてくれません。

鉄は多血性男子でした。母の看護を小さい妹に任せ、江戸へ出て転々奉公しているうち、縁があつて、素姓を隠したまま、横山家の中間部屋に入り込んだのです。

「あわよくば殿様の前へ出て、思い切り啖呵たんかを切るか、若殿をもういちど馬に乗つけて、足の一本も折つてやろうと思つたのさ。殿様は御病氣、若殿も馬に乗る様子もねえ。いい加減に諦めてオン出てやろうと思つてはいる矢先だ、妹へ紅や半襟を買つたのは、久しぶりで笹塚ささづかへ帰る土産みやげだよ。解つたか、味噌摺みそすりり奴、——手前は腹の悪い人間じやねえが、主人大事が嵩こうじて、外の者へツラく当り過ぎるよ、気を付けやがれ」

石川孫三郎も一句もありません。

「紅筆の何とかを書いて、人に嫌がらせをするような、そんなケチな野郎じやねえ。見損ないやがったか」

鉄は土間に大胡坐おおあぐらをかいて、精いっぱいの啖呵たんかを切るのです。

「よしよし解つた。が、そう解つた上はこの屋敷へおくわけに行かねえ、俺と一緒に來い」

平次は静かに鉄の肩を叩きます。

「あ、何処へでも行くよ。憚りながら岡つ引こわを怖がるような、そんな悪い事をした覚えはねえ」

立ち上がる鉄。平次はガラツ八を招くと、何やらささやいて、鉄をつれて自分家の家へ帰しました。

「御用入様、奥庭の祠ほこらを見せて下さいませんか」

「いいとも」

石川孫三郎はホツとした顔で先に立ちます。

奥庭の祠には何の変つたこともありません。白い幣^{ぬさ}を立てた、三尺四方ほど
の堂と、賽銭箱と、鈴と、それに赤い小さい鳥居と。

「紅筆の願文は、嵐^{あらし}の後で、堂を修復する話があつてから、見付かったのです
ね」

「その通りだ」

と孫三郎。

「その時堂の中は湿れていたと言いましたね」

「最初のは、まだ乾き切らない台の上にのせてあつた」

「有難うございました。それじゃまた明日の朝参ります、——皆んなへ、私が
もういちど来ることを言つておいて下さい」

平次は変なことを言つて帰つて行きます。

五

その晩平次は、中間の鉄をなだめなだめ、いろいろの事を訊き出しました。

最初はプリプリしていた鉄も、平次の心持が解ると次第に打解けて、晩酌ばんしゃくを附合いながら、滑らかに話すようになつていたのです。

その話の筋を纏めると、腰元のお松は若殿の時之助と親しく、一しきりは目に余ることもありましたが、身分の隔へだてがあるのと、母親のお勇が厳しいので、二人は次第に遠ざかつて行くらしく、お松に暇を出すと言つた、一時の噂も立消えになつてゐるということでした。

もう一つは掛り人の浅井朝丸で、これは文字もあり、腕もよく、一かどの人

間には違ひありませんが、少し道楽が過ぎるので、お勇には受けが悪く、一時は若葉を妻に申受けて、浅井家を興おこそうという話もあつたようですが、いつの間にやらそれも沙汰止さたやみになつたということです。

「紅筆の願文を書くとすると、お松か、浅井朝丸のうちと言ふことになるな。

明日は多分判るだろう」

平次は何やら成算があるらしく、四方山よもやまの話に更ふかしてその晩は寝てしまいました。

翌る朝、ガラッ八と一緒に横山家へ行つた平次。

「きょうは御家来衆奉公人をはじめ、お屋敷の皆さまの荷物を調べさせていただきます」

始めからこう言つた振れ込みで、まず用人石川孫三郎の荷物をしらべ、掛け人浅井朝丸の手廻りの品を調べました。

石川孫三郎の荷物には、何にあるわけがなく、浅井朝丸の部屋にも怪しいものは一つもありません。この人はかなりのインテリらしく、むずかしい本が幾十冊と、机の上には、よい紙、よい墨、よい筆、よい硯などを取り揃えてあります。

次は腰元のお松の部屋。

ここで平次は大変なものを見付けました。小さい手筐てばこの中につぞや平次に見せた紅皿の外に、もう一つ使いかけの紅皿があつて、それには指でなく、筆の跡があり、その紅を使つたらしい軸じくの短い紅筆までが添えてあるではありますか。

「これは？」

平次はお松の面前に突き付けました。

「あッ、——私は、私は何んにも存じません」

お松は青くなつて立ち竦すくみます。後ろからは虎視眈々こしたんたんたるガラツ八の眼。

紅皿は半分以上剥はげて、筆はかなり上等の細筆、軸は半分ほどのところから
切つて捨ててあります。穂ほの根の方が薄黒くて、元は墨に使つた筆を、洗つ
て紅筆べにふでにした様子です。

「お前のではないと言うのか」

「何んにも知りません。今朝まで此処にそんなものは入つていなかつたんです」
あまりの事に、お松は立上がる力もなく、置の上にヘタヘタと崩折れて、恐怖きょうふ
に見開いた眼が紅皿に吸い付いております。

「親分」

八五郎は後ろから、この娘の肩へ手を掛けそうにしました。

「待て、八」

「この人じやない」

大きくかぶりを振るのです。

「親分」

四方あたりをねめ廻す八五郎。

「極ごく良い唐墨とうぼくを使つている人間の仕業しわざだ、——それツ」

指した縁側には浅井朝丸が眼を光らせていました。

「野郎ツ」

飛付く八五郎。

「無礼者せんツ」

一閃せん、危うく身をかわした八五郎は、浅井朝丸の二度目の襲撃を除よける暇もありません。

「あツ」

縁側から足を踏み外して、もんどり打つて庭へ落ちるのを、浴びせて一と太刀。

が、それは平次の投げ銭に封じられました。

「えーッ」

肘ひじへ一つ、頬ほほへ一つ、ひるむところを、飛込んだ平次は、猛烈に体当りを一
つくれると、浅井朝丸の身体は朽木くちきの如く庭へ落ちます。

「待つてました」

飛付いた八五郎、こんどは用意の縄でキリキリと縛り上げてしましました。

×

「親分、変な野郎がいるもんだね」

帰り途、ガラッ八は平次の説明を誘さそいました。

「あれは本当の悪党さ、——自分で謎なぞの呪文じゅもんを書いておきながら、用人に、耶や

馬台の詩みたいだ——って言つたそうだ。誰かに読んで貰わなきや困るが、自分で読んじや拙かつたのさ。幸い俺は、辻講釈で聴いて、吉備真備きびのまさびが蜘蛛くもに教わつて、耶馬台の詩を真ん中の一字から——東海姫氏とうかいきしの国——と渦巻形に読んだと知つていたから読めたのさ」

「じや始めからあの居候野郎が怪しいと睨んだんですか」

「そうでもない、一時はてつきり鉄の仕業と思つたよ。でもきのうの様子で鉄でないと解つた、——そこで、用人に言つて前触れしておいて、きょう荷物しらべをしたのは、悪者の細工を見るためさ。それが図星に当つて、紅皿と筆をお松の手筐てばこに入れたのは、罠に掛つたようなものだ」

「——」

「わざと筆の軸じくの銘めいを切つて、善い筆か悪い筆か解らないようにしたが、上等の唐墨とうぼくを洗い落すのが、少しざんざいだつた」

「何だつて新しい筆を使わなかつたんでしょう」

とガラッ八。

「字でも書こうという程のものは、妙に筆を惜しがるものだよ。使い古した筆を洗つてごま化したのが間違いさ」

「それで市が栄えるわけだね、親分」

「横山家では無事に葬とむらいを出せるだろうし、鉄の野郎には三十両のお手当を貰さきづかつて来たから、俺の仕事は済んだようなものだ」

平次はそう言つて、懷に呑んだ三十両の小判にさわつて見るのでした。これで鉄は笹塚へ帰つて、母親の養生も存分に出来るというものでしよう。

「あの娘は綺麗だね、親分」

「だが、可哀想だよ、一番氣の毒なのはあの若葉わかばとかいう娘さ」

平次は暗然あんぜんとしました。本当に妙な事件です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかる、差別的な語句や表現が見られます
が、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でも
あり、著者が故人でありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承
のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本——「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

紅筆願文

編集・発行

錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>